角川文庫
—3172—

復讐の弾道

大藪春彦

角川書店

昭和四十八年十月三十日　初版発行
昭和五十三年三月二十日　九版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

復讐の弾道

著作者　大藪春彦
発行者　角川春樹
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

in Japan　旭印刷・本間製本
0193-136201-0946(2)

復讐の弾道

大藪春彦

角川文庫

出獄

1

正面約二百五十メーター、横七百メーターの長く高い塀で囲まれた府中刑務所の西門は改修中で、閉鎖されていた。

臨時の正門として使用されている北門は、刑務所正面側から見て左側の塀の中ほどにあり、小、中学校や明星学園などが並んでいるために学園通りと名づけられた道路に面していた。

十一月初めの朝の冷たい雨が刑務所の灰褐色の塀を濡らし、うなだれた柳の枝から水滴をこぼしていた。学園通りと刑務所の塀に沿って北門の前に細長くのびた砂利敷きのパーキング・ロットには二、三台の車が駐まっていた。カー・ラジオのボリュームを上げた車内では、黒っぽい背広の襟にそれぞれの属する暴力団のバッジを光らせた男たちが時計を気にしている。

午前九時――車から降りた男たちは、互いを意識して肩を怒らせながら、潜り戸とともに閉じられている北門の前に並んだ。

重い軋りを洩らし、鈍い鶯色に塗られた鋼鉄製の北門が開かれた。看守に見送られて、ボストンバッグやスーツケースを提げた男たちが三、四人姿を現わした。みんな、まだ髪がのびきっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てない。が、出所の数か月前から髪をのばすことを許されて、クルー・カットには見える。

黒服の男たちは、それぞれの相手を出所者たちのなかに見つけると、

「兄貴、ご苦労さんでした」

「社長がお待ちかねですぜ、さあ、早く……」

などと言いながら、駐めてある車に抱えるようにして連れていく。

北門の前には、最後に出てきた男だけが残った。荒削りの顔と重量級のボクサーのような体を持った三十二、三の男だ。

その男は荷物を提げてなかった。ナフタリン臭いバーバリーのレイン・コートの襟を立てると、鋭いが暗い瞳で雨雲を見上げ、塀に沿って歩きだす。

「北川君、しっかりやれよ。二度とこんなところに戻るんじゃないぜ」

担当の看守が、男の広い背に声を掛けた。

「お世話になりました」

男は唇だけで笑った。俺の本名は北川守なんかでないと教えてやったら、看守はどんな顔をするだろうと思うと、瞳にも薄笑いが浮かんでくる。

パーキング・ロットの車が、砂利と排気煙を男に浴びせて、つぎつぎにスタートした。男は三年のあいだ自分を閉じこめていた檻の灰色の塀に向けて、歩道に転がっている石を蹴とばした。

しばらく歩くと、学園通りは刑務所正面前の道路とぶつかる。男はその道を左に折れた。泥水の飛沫をあげてダンプやトラックの往来が激しい。

灌木の植込みなどを前にした刑務所正面側の塀には、道路を横切って専用の鉄道レールが引きこまれ、その横に改修中の西正門の板囲いが見えた。

道路の右手には、下河原線の向こうに、東芝車両工場が一つの町をなして白く広がっていた。北府中駅は、その東芝工場への入口のところにある。

男はクルー・カットにした短い髪から額に垂れてくる水滴をレイン・コートの袖で拭い、通勤者の群れが落としていったのであろう煙草の吸殻やチューイン・ガムの包み紙が散乱した北府中駅に近づいた。

駅の売店で煙草を五つほど買った。先ほど返してもらった財布には、全財産である五万円がはいっている。そのうちの数千円は、刑務所のなかで働いて稼いだ金だ。

煙草をくわえ、サービスのマッチで火をつけようとして、背広のポケットにダンヒルのライターがあることを思いだした。三年前に入れたガスだから自信はなかったが、その銀色のダンヒルは一発で青い炎をゆらめかせた。

男は甲州街道に向かって歩きだす。親指と人差し指で摘んだ煙草を掌で覆い隠すようにして貪り吸うのは、雨に濡らさないためだけでなく、この三年間に身についた習性かもしれない。

使役に出たときに拾ったりした、巻紙が茶色に変色した吸殻と違って、柔らかく肺にしみこむニコチンは急激に体じゅうにまわっていき、軽い吐き気さえも覚えさせた。

空車のタクシーが通りかかった。男は煙草を捨て、鋭く口笛を吹いてそれを呼びとめる。タクシーは新しいセドリックであった。男が入所してから出たニュー・モデルだが、刑務所内でガソ

リン自動車二級整備士の免許を取った彼には、はじめて見る車ではなかった。
タクシーは二、三度ハンドルを切り返してUターンして停まった。男が乗りこむと、若い運転手は、
「どこに？」
と、仏頂面で尋ねる。
「新宿だ。それから、ヒーターを入れてくれ。服を乾かす」
男は言って二本めの煙草に火をつけた。
「冗談じゃない。勘弁してくださいよ。ヒーターをつけると窓が曇ってしようがない」
走りだすとすぐに、トップにギアを入れてエンジンをノッキングさせながら、運転手は鼻で笑った。
「久しぶりにタクシーに乗った。青いバスよりは乗り心地がいい」
男は呟くように言ったが、その声には冷たいすごみがあった。
「え……？　それじゃ、旦那は……」
運転手は首筋を緊張させた。
「どうだい、近ごろの景気具合は？」
「相変わらず、いくら稼いでも追いつかないってところで」
「まあ、それでも元気そうで何よりだ。あんたが事故で死なないように祈るよ」
「すみませんでした。徹夜で流してたんで苛々してました……さあ、暖まってください」

運転手は鼻の下に浮いた汗を手の甲で拭った。その手でヒーターのスイッチを入れる。鈍い音をたててモーターが唸り、暖風を吹きだした。

タクシーは、道を横断している米空軍司令部に通じる引込み線を渡った。道の右手に日本製鋼の大工場が、冬休みの大学のキャンパスのような落着きを見せて広がっている。

タクシーは混雑した甲州街道にはいり、左に折れる。しばらく行くと調布バイパスだ。道幅が広くなったその直線道路を、ほとんどの車がスピード・オーバーで飛ばす。男の乗ったタクシーのスピード・メーターも、八十から百を上下し、ヒーターで曇った後窓は細目に開かれたサイド・グラスやベンチレーターから吹きこむ風に拭われる。

男は久しぶりのスピード感に酔った。そして三年前のあの時の失敗のことを想いだして唇を歪める。

男の本名は羽山貴次、北川守というのは六年前に横浜真金町のドヤ街で戸籍とともに、肺病で死にかけていた男から買った名前だ。

羽山は、北川という新しい名を得て、自分の過去を断ち切ろうとしたのだ。そして、人生の再スタートを切るために、自衛隊にはいった。

北川名の羽山は辛い訓練に耐え、だらけた体と気持ちを鍛え直した。羽山の人のよさにつけこんでさんざんに利用してきた暴力団も、自衛隊のなかまでは追ってこなかった。羽山は北川名で運転免許証もとった。

しかし、運命の神は羽山に対して冷酷であった。入隊して二年後、射撃に対する抜群の成績を

認められて陸上自衛隊富士学校の教官に抜擢された羽山が、習志野の降下部隊に射撃コーチとして出張し、小隊に速射技術を教えているとき、隊員の一人が暴発事故を起こしたのだ。

不運な凶弾は、射場のはるか先にある富士見団地の主婦の額を貫いた。世論はわき、当然のことながら羽山は責任をとって退職した。

羽山自身にも自責の念が強かった。だから羽山は、町を捨てて、飛騨の山奥のダム工事現場のブルドーザーの運転手として、世捨人の人生を送ろうとした。それに、すべてのことがわずらわしくなっていたのだ。

しかし、運命は羽山を静かに生きさせてくれなかった。建設会社のダイナマイト係が落盤で死んだとき、羽山は自分も火薬取扱いの許可証を持っていることをしゃべってしまった。むろん、自衛隊にいたとき取得した北川名義のだ。

羽山が北川名で、臨時雇いのブルドーザー運転手として働いていたその会社は、大会社の下請けのまた下請けであった。実体は暴力団の資金源であった。

羽山はダイナマイト係として、その会社に正式に入社した。給料はブルドーザーの運転手をしていたときの三倍であった。

高給の理由は、すぐにわかった。会社は工事用のダイナマイトを、暴力組織に流していたのだ。高給は口止め料であった。

横流ししたダイナマイトの帳面づらを合わせる仕事に抗議した羽山は、十数人の暴力団員に取り巻かれた。多勢のうえに、相手は銃を持っていた。半殺しの目に会った羽山はふたたび暴力組

織に引きずりこまれた。

羽山は、自暴自棄になり、悪の才能をのばしていった。そして、町に戻った羽山は、流れ流れて、金庫破りの一味にさそわれた。捕まって刑に服しても、自分の肉親に傷がつかないように北川名を捨てないことが、ただ一つの救いであった。

三年前のあの時は、もう成功したも同然であったのだ。計画どおりに他の二人と渋谷松濤町にある金融業者の自宅の金庫を破り、三千万近い現ナマを手に入れたのだ。現ナマと二人の仲間を乗せた盗品のジャガー三・八リッター・セダンを運転して、三人が共同で借りている杉並大宮前の隠れ家に向かいながら、男――羽山の顔に興奮の色はなかった。

後ろのシートの二人は、本間と望月という男だ。二人とも羽山よりも十歳ほど年上で、金庫破りにかけては羽山の先輩であった。

しかし、彼らにしても一度に三千万の札束を掴んだのは初めてであった。三千万の札束と、札束と一緒に頂戴してきたオールド・パーのスコッチのラッパ飲みが、二人の冷静さを完全に奪い、危険な狂騒状態に追いこんでいた。二人はハンドルを握る羽山の口にもスコッチを流しこみ、

「飛ばせ。エンジンが焼けるまでブッ飛ばすんだ！」

とわめいた。

午前四時の甲州街道は、行き交う車は、数えるほどであった。街道に面した交番の巡査も居眠りをこらえている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サードで思いきり引っぱってからトップに入れると、ジャガーのセダンはたちまち百五十キロに達した。風圧が凄まじい。

「その調子だ、もっと飛ばせ」

望月がエンジンとギアの咆哮に負けずに怒鳴る。

前方百メーターの大原交差点の信号が黄色に変わった。羽山は、反射的に右の踵でブレーキを強く踏み、スピードを百キロまで殺すと、ギアをニュートラルに戻した。踵はブレーキを踏んだまま靴先でアクセルを踏んでエンジンを空ぶかしし、ギアをサードに落とす。ギアはチーズを切るようにサードに吸いこまれた。

エンジン・ブレーキは悲鳴をあげ、ジャガーは巨人に後ろ髪を掴まれたように急減速する。羽山はさらにヒール・アンド・トウのダブル・クラッチを使ってローまでシフト・ダウンし、交差点の前で車を停めることができた。

ただブレーキを踏んだだけなら、絶対にこんなに短い距離で停まることはできない。自分の運転技術のレーサー並みの正確さに酔った羽山は、交差点で右折して水道道路にはいると、急発進と急減速を楽しんだ。発進するときには三千回転までエンジンをふかしておき、クラッチを滑らせながらアクセルを一杯に踏みこむと、一瞬クラッチと、タイヤが焼ける匂いを残して蹴とばされたようにスタートする。

乱暴なスタートと急停止の度に、後のシートの二人はバランスを崩しながら羽山をけしかけた。

調子に乗った羽山は高井戸署の手前の交差点に近づいたとき、署の前に駐まっていた二台のパ

トカーが、いっせいに真っ赤なスポット・ライトを点滅させ、サイレンを咆哮させながら走り出てきたのを見て罵声を漏らした。パトカーはジャガーが猛スピードで通り過ぎてきた道筋の各交番から、連絡を受けて待ち伏せていたのだ。

二台のパトカーは並び、狭い水道道路に立ちふさがった。羽山は百三十キロから急激に九十キロまでジャガーのスピードを殺すと、右側の道に向けてハンドルを大きく切った。直角ではなくV字に近い鋭角のカーブだ。

タイヤはエンジンとともに悲鳴をあげ、遠心力で車体は大きく外側に傾き、内輪は浮きあがった。外側前輪に車体の重さの大半がかかる。

それでも羽山は、そのカーブを曲がりきれると計算した。後ろの二人はドアに叩きつけられる。この場さえ切り抜ければ、トラック・エンジンを積んだ鈍重なパトカーなどから逃げきるのは楽な仕事だ、と羽山は思った。

だが、すでに過熱していた外側前輪のタイヤは、爆音をたててパンクした。バーストだ。ジャガー三・八はコントロールを失い、コマのように回転してから横倒しになった。

横倒しになったまま摩擦の火花を散らして三十メーターほど滑り、電柱をへし折ってやっと停止した。

潰れて開いたドアから放りだされた望月は、頸椎が項の皮膚を破って突きだしていた。本間は前窓に顔を突っこみ、ぎざぎざになったガラスの破片に頸動脈を切断されていた。二人とも、申し分のない即死だ。

そして羽山は、ダッシュ板に叩きつけられた肋骨を三本折られて、意識が薄れていった。薄れていく意識のなかで、冷静さを失うような馬鹿なことは二度とくり返すまいと心に誓っていた。

羽山は裁判の時も北川の名で通した。

戸籍謄本に顔写真や指紋が載っているわけではないから、羽山は本名を知られずに判決を受けた。本物の北川は裁判のとき名乗りでなかったから、すでに死んでいるのかもしれない……。

そして、懲役三年という最軽量の判決を得るために羽山は、超一流の弁護士を雇い、これまで稼いだ金をその弁護士に全部吐きださなければならなかった……。

2

調布バイパスを過ぎ、烏山バイパス入口のネックに来ると、たちまちタクシーは一寸刻みにしか動けなくなった。タクシーの前を行くレンタカー・クラブのシボレーに乗った派手なセーターの若者と、女給だかズベ公だか区別のつかない女は、車が動かなくなるたびに接吻をくり返している。

「お客さん、アタマに来ませんか？」

タクシーの運転手が前のシボレーから黄色っぽく光る瞳を離さずに言った。

「ああ、アタマに来たよ。長いこと女を抱いてない」

羽山は乾いた硬い唇を舐めた。

「近ごろは不便になりましたな。金の余っている奴かチンピラかのどっちかでないと遊べなく

なった」
「金は持っているが」
羽山はカマを掛けてみた。
運転手はしばらく考えているようであったが、後ろを振り向くと、
「二万円あればいいんですよ」
と呟く。
「出そう」
「そうと決まれば善は急げだ。朝っぱらから遊んで悪いって法はありませんからね」
「場所は？」
「四谷の某所とだけ言っておきましょう。二万円で三時間ですよ。そのほかに飲み食いのほうは実費だけ払ってやってください」
運転手は言った。
「わかった。だけど、その前に笹塚の交差点で左に折れてくれ。ちょっと寄る所があるんだ」
羽山は言った。
前を行くシボレーのアベックは、接吻の反復をやめない。これが夜ならば、スカートとズボンを汚しあうところであろう。
烏山バイパスにはいると、車の流れはまた早くなった。タクシーはシボレーをすれすれに抜いて尻を振る。

環状七号は羽山が捕まる前と一変していた。タクシーは笹塚交番前で左に折れて少し走る。

「どこまでなんです？」

「中野区にはいったらすぐに、左手に太陽モーターズというところがあるはずだ。その手前で停めてくれ」

羽山は言った。太陽モーターズはすぐに見つかった。町工場にしてはかなり規模が大きい修理工場であった。

「心配するな。これを預けとくよ。メーターは待ちにしてもいい」

工場の塀に寄せてタクシーを停めた運転手に千円札を二枚放りだし、羽山は工場の門をくぐった。

前庭には三十台ほどの故障車が埃にまみれている。その奥の屋内作業場では十台ほどの車と二十人ぐらいの修理工が格闘していた。エンジンの空ぶかしの騒音、板金のハンマーの騒音、塗装のシンナーの匂いが羽山に一瞬刑務所の作業場に戻ったような錯覚におちいらせた。

屋内作業場の上が工員の寮になっているらしい。そして事務所は作業場の左手にある。羽山は事務所に歩いた。

受付の男は土色の顔をした中年男であった。シンナーの匂いを放つハンカチを鼻に当てていたが、羽山の姿を認めて、ハンカチをゆっくりとデスクの引出しにしまった。シンナーの中毒者だ。おそらく刑務所生活の体験者であろう。アルコールのかわりにシンナーを嗅いで酔っているうちに、シンナーなしでは過ごせなくなる。

「車の故障かね？」
受付の男は無愛想に尋ねた。事務室にはそのほかに、作業服の検査係と女の事務員が二人見える。
「北川という者です。今しがた府中から出てきました。ここの社長さんは保護司をやっていらっしゃるので訪ねていけ、と、出所するとき言われましたので……」
羽山は頭をさげた。
「ちょっと待ってくれ」
受付の男はのろのろと立ち上がり、社長室と書かれた奥の部屋のドアをノックしてはいった。しばらくして席に戻ると、無言でそのドアを指さす。羽山は小腰をかがめて社長室にはいっていった。女の事務員の横を通るとき、淡い化粧の匂いと体臭を肺深く吸いこむ。
金庫とロッカーとデスクとソファの置かれた殺風景な社長室では、毛がだいぶ抜けた熊皮を敷いた肘掛け椅子に、肥満した背の低い男がそっくり返っていた。豆腐の棒のようにしまりのない人差し指は分厚い金の指輪でくびれている。
「来たか？　儂が大森だ。副所長から連絡があった。どうだ、娑婆の空気は？」
社長は女のように甲高い声で言った。
「もう二度と閉じこめられたくありません」
羽山は殊勝気に瞼を伏せて見せた。
「そうだろう、お前も馬鹿でないから、もう二度と悪いことをやるのはよして、真面目に働く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com